カナダの生活の中から

川村　総子

「カナダの社会はモザイクだ」とよく言われる。たしかにカナダの生活を始めた時、その人種と文化の多様であることが、日本で育った人間には大きな驚きであった。向こう三軒両隣り日本人ばかりで、社会とはこういうものだと思いこんでいた私は、オンタリオ州キングストンのアパートの住人となった時、カナダ人とは何人なのかと不思議に感じたものだ。

アパートに引越した日に、夫と私は近所の方々にごあいさつに行ったのであるが、そのときの出会いがまだ強く印象に残っている。まず、わが家の右隣りの上品な老夫人は、ひとり住まいで、イギリスから来たばかり。左どなりの家族は、若い二人で、昼間はいつも留守だという。廊下をはさんで前のお宅は、「アイルランドから来た一家です。ようこそカナダへ！」。そのお隣りは、にこにこした生れながらのカナダ人の中年の御夫妻――という具合で、私たちの近所付き合いが始まった。

アパートに住んで間もなく、よく顔を合わせる同じ階の人々の中に、まだまだいろいろな国々から来た人々がいることがわかった。二人の子供のいるパキスタン人の家族、それからポルトガルから来た若い二人。異なった人種、文化の背景をもった人々が、ごく当たり前のように社会を作っていることが、右も左も日本人ばかりの生活がしみついた私には、とても不思議な気がした。そういえば、東洋人の姿をした私が、どこへ行っても何の異和感もなく自然に応対されることが、カナダ社会の特色ではないかとさえ思い始めた。

そんなある日、我々は、隣人の若い二人――彼女マリーはこの町の法律事務所の法律秘書、彼シースはちょっと天才肌の軍楽隊の音楽家――を、夕食後のひとときに、日本のウイスキーやおつまみを用意して招いた。「カナダはどう？」という話から始まって、夜遅くまで楽しく飲んでしゃべったその夜の話の中で交わされたシースの次の言葉は、私の心にカナダの生活の最後まで消えることがなかった――「カナダに住んでいれば、みんなカナダ人だと僕たちは思っている。今、君たちはすぐに日本人というけれど、カナダに住んで英語を話している君達を、僕はカナダ人だと思う。」日本に住む外国人に、こんなことを言う日本人がいるだろうか。異邦人ということばを頭の中にちらちらさせながら暮していた私たちには、何というあたたかな言葉だったろう。

夫の勤務する研究所で翻訳を専門にする女性は、私達がこの町に着いた日に紹介された時、ポーランドから来ましたと言っていた。そのアイリーンと御主人のエドが、わが家の夕食に加わった夜、私はまた面白いことを聞いた。彼らは、十年前カナダに来るまで、九年間イギリスに住んでいたという。そして、エドのいうことに、「イギリスで苦労して大学を出たけれど、ポーランド人の下で働くイギリス人なんていやしない。一生イギリスにいたって、ポーランド人はポーランド人と言われる。それに比べ、カナダでは、昨日カナダに来た人だって、ニュー・カナディアンと呼んでくれる。そして、実力さえあれば、何国人なんていうことをいう人間なんていない！君たちもずっとカナダに住んだら？」彼の言葉の中には、移民として苦労し、今、新しい地で根をはり、立派な研究者として生活を営む人の自信と、カナダに対する誇りと愛情が感じられた。

私は、この二人の言葉の中に、ぴったり一致するものを見出したことが面白かった。又日本人であることを毎日心の中でくり返し、言葉が不充分であることからくる疎外感と、自分の育ってきた文化の根を見出せない社会に生活している不安をもって暮していた私には、開放感を与え、カナダ社会の良さをしっかりと感じさせてくれる言葉だった。少くとも、社会のお客様ではなく、市民として、この土地に愛情を感じ、地に足のついた生活を心がけようと思ったのだった。

編集後記

○今号はカナダ文学に焦点を当ててみました。カナダの文学作品や文学史を通じて、その国民性や社会に対する理解を深めていただきたいと思います。

○できるだけカナダ文学の全体像をお伝えしたかったのですが、編集者自身にもいくつかの不満が残りました。インディアンやエスキモーの作品をはじめ、カナダを構成するいろいろな民族の文学をご紹介する事ができませんでした。カナダにおける文芸評論の第一人者ノースロップ・フライについても、ごく簡単にふれただけです。両方とも、別の機会に取上げるつもりです。

○当然紹介すべき作家でありながら、もれてしまった人もあるかもしれません。「空港」などで有名なカナダ出身のアーサー・ヘイリーや、最近日本でも話題になった「最後通諜」や「英国脱出」の著者リチャード・ローマーなどについても割愛せざるを得ませんでした。

○カナダ文学は、一部を除いて、日本ではこれまであまり知られていませんでした。この特集号により、いくらかでも関心を高めていただければ幸いです。ご意見やご感想をお寄せ下さい。

編集者　吉田健正

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を表わすものではないことをお断わりします。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。なお、ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒107 東京都港区赤坂七丁目三―三八
カナダ大使館広報部